

研 究

小学校中学年から中学生の生活の 満足度 (QOL) 質問紙の標準化

中村 伸枝¹⁾, 星野 美穂²⁾, 二宮 啓子³⁾
石井 康子⁴⁾, 今野 美紀⁵⁾, 錢 淑 君⁶⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」の標準化を行い、通常学校に在籍する児童生徒の基礎データとすることである。全国6道県、12の小中学校に在籍する、小学生1,106名と中学生1,004名から有効回答が得られ、小中学校別および性別の標準値が算出された。小中学生を比較すると、総得点とすべての下位尺度において小学生のほうが中学生より有意に得点が高かった。性別比較では、「F1: 不安や悩み (がない)」および「F6: 体力と勤勉性、自尊感情」が、女子より男子の方が有意に高かった。加えて、中学生では総得点は男子の方が有意に高く、「F3: 友達の満足」は、女子の方が有意に高い結果であった。

本調査の結果は、通常学校に在籍する児童生徒の基礎データとして活用可能である。

Key words: 生活の質, 児童生徒, 質問紙, 標準化

I. はじめに

近年、児童生徒の身体的な健康面だけでなく、心理・社会面についてもさまざまな問題が生じている。多くの児童生徒は健康的であり、さまざまな問題を乗り越えながら生活していると考えられる。しかし、児童生徒自身が自分の生活にどの位満足しているか、また、年齢に応じた生活の質が得られているのかという点については不明な点が多い。児童生徒自身の主観的な満足度をとらえ、必要な支援方法を考えていくことは重要である。近年、小学生に QOL 尺度をスクリーニングとして用い、主に児童の精神面や学習面での支援システムにつなげていく試み

も行われてきた¹⁾。また、慢性疾患など疾患をもつ小児の生活の質を考える際に、健常児と等しい生活の質が得られているかという視点をもつことも大切である。

筆者らは、2002年に37項目からなる「小学校高学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」を作成し、質問紙が信頼性・妥当性のあることを確認した²⁾。そして、健康上の問題をもつ児童生徒の生活の満足度を通常学校に在籍する児童生徒と比較して、どのような支援が必要かを考える等の調査を行ってきた³⁾⁴⁾。しかし、2002年に作成した質問紙は1つの県の1小学校と1中学校の児童生徒を対象として実施したのみであった。そこで、日本各地から抽出し

Standardization of Questionnaire to Assess QOL for Primary School Children at Third Grade
and Above and Junior High School Student

[1927]

Nobue NAKAMURA, Miho HOSHINO, Keiko NINOMIYA, Yasuko ISHII, Miki KONNO,
Shu Chun CHIEN

受付 07. 4.12

採用 07. 7.14

1) 千葉大学看護学部 (看護師) 2) 群馬県立県民健康科学大学 (看護師) 3) 神戸市看護大学 (看護師)
4) 岐阜県立看護大学 (保健師) 5) 札幌医科大学保健医療学部 (看護師) 6) 宮崎県立看護大学 (看護師)
別刷請求先: 中村伸枝 千葉大学看護学部 〒260-8672 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

Tel/Fax: 043-226-2415

た複数の小中学校における調査に基づき、質問紙の標準化を行い、通常学校に在籍する児童生徒の基礎データとすることを目的に本研究を行った。なお、本質問紙は小学3、4年生から使用可能であるため、本研究では「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」とする。

II. 研究目的

「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」の標準化を行い、通常学校に在籍する児童生徒の基礎データとする。

III. 研究方法

1. 研究対象

北海道・東北、関東、中部・東海、近畿・中国・四国、九州・沖縄地方の小中学校各1、2校に在籍する小学3年生から中学3年生の児童生徒。

2. 研究方法

i) 調査内容

「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」、年齢、性別、家族構成を含む無記名の自記式質問紙調査。

ii) 「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」

本調査用紙は、小学校中学年から中学生を対象に発達課題を考慮して作成された包括的なQOL質問紙である²⁾。37項目、6下位尺度、「F1: 不安や悩み (がない)」、「F2: 家と家族の満足」、「F3: 友達の満足」、「F4: 学校と先生の満足」、「F5: 全体的な健康の満足」、「F6: 体力と勤勉性、自尊感情」、からなる。1～5の選択肢の中から回答するリッカート式尺度であり、得点範囲は37～185点、高得点は満足度 (QOL) が高いことを示す。

iii) 調査期間

平成18年6月～10月

iv) 調査手順

各地域の研究者が直接あるいは教育委員会に相談のうえ小中学校に依頼し、学校長の承諾が得られた小中学校に対し、参加可能な学級数と児童生徒数、および実施可能な時期を確認した。

その後、質問紙と保護者宛ての説明文書を各学校に郵送し、学校の空き時間等に担任教諭等が実施し、回収・返送するよう依頼した。

v) 倫理的配慮

千葉大学看護学部倫理審査委員会の承認を受け、以下の内容を遵守して実施した。事前に学校長から保護者宛に、児童生徒に調査を行うこと、調査目的・方法・倫理的配慮、保護者の承諾が得られない場合には回答しなくてよい旨の文書を配布するよう依頼した。児童生徒には、自由意志による調査であり成績とは無関係であること、答えたくない項目については答えなくてよいこと、プライバシーの保護等について質問紙の表紙に明記するとともに、実施する教諭に口頭で説明するよう依頼し、無記名で実施した。回収袋に各自で投函してもらい、投函をもって同意とした。

3. 分析方法

「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」の下位尺度および総得点の信頼性係数 (Cronbach's α)、平均値、標準偏差を求めた。また、対応のないt検定を用いて小中学校別、地域別、性別の比較を行い、通常学校に在籍する児童生徒の標準値とした。有意水準は5%未満とした。

IV. 結果

1. 対象の背景

北海道から九州に至る全国6道県の14校に依頼し、12校の小中学校から協力の承諾を得た。協力の承諾が得られなかった2校の理由は、他の調査がきていること、調査依頼は基本的に受け入れていないことであった。12校の児童生徒から、合計2,351名の回答が得られた (回収率89.3%)。このうち、無回答を1割以上含むものの、全問同じ番号に回答したものを除き2,110名を分析対象とした (有効回答率89.7%)。対象となった小学生の概要を表1-1に、中学生の概要を表1-2に示した。小学生は1,106名 (男子522名、女子584名)、中学生は1,004名 (男子515名、女子489名) であった。小学3年生は2地域の各1校のみが参加した。

表 1-1 対象者の背景 小学生

地 域	学校数	回収率	男子	女子	3年	4年	5年	6年	合計
北海道・東北	1校	95.4%	128名	153名	79名	65名	68名	70名	281名
関東・中部	1校	86.0%	87名	109名	0名	66名	58名	72名	196名
近畿・中国四国	2校	98.5%	177名	194名	0名	130名	107名	134名	371名
九州・沖縄	2校	89.5%	130名	128名	46名	61名	76名	75名	258名
合 計	6校	92.9%	522名	584名	125名	322名	309名	351名	1,106名

表 1-2 対象者の背景 中学生

地 域	学校数	回収率	男子	女子	1年	2年	3年	合計
北海道・東北	2校	92.3%	209名	186名	122名	138名	135名	395名
関東・中部	2校	79.1%	153名	140名	111名	89名	93名	293名
近畿・中国四国	1校	92.2%	108名	111名	79名	60名	80名	219名
九州・沖縄	1校	79.5%	45名	52名	41名	29名	27名	97名
合 計	6校	86.7%	515名	489名	353名	316名	335名	1,004名

2. 質問紙の信頼性係数と小学生・中学生における標準値

質問紙の信頼性係数は、総得点で0.93、下位尺度で0.69～0.84であり、おおむね良好な値であった（表2）。総得点の得点範囲は46点から180点であり、総得点（図1）および下位尺度の分布は正規分布を示した。

小中学生全体の標準値および、小学生・中学生別の標準値、t検定による小学生・中学生比較の結果を表2に示す。総得点とすべての下位尺度において、小学生の方が中学生より有意に得点が高く、生活の満足度が高い結果となった。

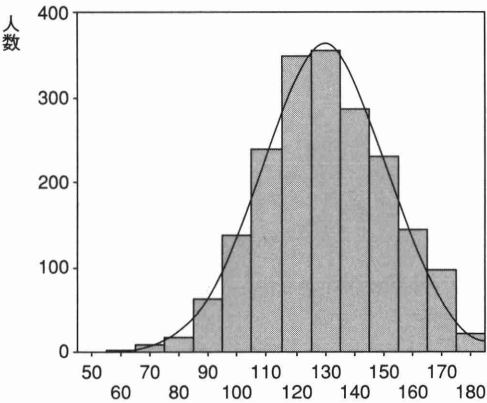


図 1 「小学校中学年から中学生の生活の満足度（QOL）」の総得点分布

3. 質問紙の地域別比較

地域別比較の結果を表3-1、表3-2に示す。小学校では、総得点とすべての下位尺度で北海

表 2 「小学校中学年から中学生の生活の満足度（QOL）質問紙」の信頼性係数と標準値、および小中比較

	信頼性係数	小中全体 n = 2,110	小学生 n = 1,106	中学生 n = 1,004	t 値 (p 値)
F1：不安や悩み（がない）	0.84	28.4±7.6	31.1±7.4	25.6±6.7	17.08 (p < 0.001)
F2：家と家族の満足	0.78	24.7±5.7	25.9±5.6	23.3±5.4	10.66 (p < 0.001)
F3：友達の満足	0.83	19.8±3.6	20.3±3.7	19.3±3.4	6.33 (p < 0.001)
F4：学校と先生の満足	0.80	14.3±3.5	15.4±3.4	13.0±3.2	15.86 (p < 0.001)
F5：全体的な健康の満足	0.69	19.2±3.5	20.0±3.4	18.3±3.4	10.63 (p < 0.001)
F6：体力と勤勉性、自尊感情	0.78	23.6±5.1	25.2±5.0	21.9±4.6	15.27 (p < 0.001)
総 得 点	0.93	129.7±21.3	137.8±20.8	121.3±18.7	18.40 (p < 0.001)

対応のないt検定

表3-1 小学生の「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」の地域別比較

	北海道・東北 n = 281	関東・中部 n = 196	近畿・中国四国 n = 371	九州・沖縄 n = 258	F 値 (p 値)
F1: 不安や悩み (がない)	29.8±7.6	31.6±7.2	30.8±7.2	32.1±7.7	4.76 (p = 0.003)
F2: 家と家族の満足	25.3±5.6	26.3±5.4	25.6±5.8	27.1±5.5	5.33 (p = 0.001)
F3: 友達の満足	19.0±3.7	20.2±3.6	20.6±3.5	21.2±3.5	19.76 (p < 0.001)
F4: 学校と先生の満足	14.6±3.5	15.1±3.2	15.5±3.4	16.2±3.2	11.31 (p < 0.001)
F5: 全体的な健康の満足	19.5±3.6	20.0±3.2	20.0±3.5	20.4±3.3	2.94 (p = 0.03)
F6: 体力と勤勉性, 自尊感情	23.5±5.1	25.3±4.9	25.2±4.9	26.7±4.7	19.65 (p < 0.001)
総 得 点	131.4±20.4	139.5±21.0	137.1±20.5	143.9±19.8	15.73 (p < 0.001)

一元配置分散分析

表3-2 中学生の「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」の地域別比較

	北海道・東北 n = 395	関東・中部 n = 293	近畿・中国四国 n = 219	九州・沖縄 n = 97	F 値 (p 値)
F1: 不安や悩み (がない)	25.6±6.8	25.5±6.5	25.3±6.4	26.9±6.7	1.58 (p = 0.192)
F2: 家と家族の満足	23.2±5.1	23.9±5.5	22.7±5.3	25.5±5.1	8.18 (p < 0.001)
F3: 友達の満足	19.0±3.5	19.7±3.1	18.9±3.4	21.3±2.9	15.03 (p < 0.001)
F4: 学校と先生の満足	13.3±3.2	12.4±3.4	12.5±3.0	15.1±3.1	20.75 (p < 0.001)
F5: 全体的な健康の満足	18.4±3.3	18.5±3.4	18.1±3.5	19.2±3.4	3.15 (p = 0.02)
F6: 体力と勤勉性, 自尊感情	21.9±4.2	21.9±4.7	21.3±4.7	24.0±4.8	9.42 (p < 0.001)
総 得 点	121.4±17.1	121.8±18.8	118.5±18.8	132.5±18.0	14.90 (p < 0.001)

一元配置分散分析

道・東北が低く, 九州・沖縄が高かった ($p < 0.03 \sim p < 0.001$)。また, 中学生では, 総得点と F1を除くすべての下位尺度で九州・沖縄が高い結果となった ($p < 0.02 \sim p < 0.001$)。有意差の大きな下位尺度は, 小中学校ともに「F3: 友達の満足」, 「F4: 学校と先生の満足」, 「F6: 体力と勤勉性, 自尊感情」であった。同地域に複数校を含む地域では, 学校による有意差もみられた。

4. 質問紙の性別の標準値と性別比較

小学生および中学生の性別の標準値と t 検定による性別比較の結果を表4-1, 表4-2に示す。小学生では「F1: 不安や悩み (がない)」 ($p < 0.001$), 「F6: 体力と勤勉性, 自尊感情」 ($p = 0.002$) が, 女子より男子の方が有意に高かった。また, 中学生では総得点 ($p < 0.001$), 「F1: 不安や悩み (がない)」 ($p < 0.001$), 「F6: 体力と勤勉性, 自尊感情」 ($p < 0.001$) が, 女子より男子の方が有意に高く, 「F3: 友達の満足」 ($p < 0.001$) は, 女子の方が男子より高い結果

であった。

5. 総得点の性別・学年別比較とパーセンタイル表

総得点の性別, 学年別平均値を図2に示した。小学校6年 ($p < 0.05$), 中学校1年 ($p < 0.05$), および中学校2年 ($p < 0.01$) において性差がみられ, いずれも男子が女子より有意に高かった。学年間の比較では, 小学校5年と6年 ($p < 0.05$), 小学校6年と中学校1年 ($p < 0.05$) の間に有意な低下がみられた。総得点の性別・学年別のパーセンタイル表を表5に示す。

V. 考 察

本研究では, 北海道から九州に至る全国6道県, 12の小中学校の児童生徒2,110名のデータを分析し, 「小学校高学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙」の標準値を得た。総得点および下位尺度において信頼性係数はほぼ0.7以上であり, 正規性も確認されたため, 本質問紙は, 小中学生の QOL の測定に使用可能と考える。ただし, 小学校3年生については,

表4-1 小学生の「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL)」の性別比較

	小学生		t 値 (p 値)
	男子 n=522	女子 n=584	
F1: 不安や悩み (がない)	31.9±7.4	30.1±7.4	3.93 (p<0.001)
F2: 家と家族の満足	25.9±5.5	26.1±5.8	-0.52 (p=0.602)
F3: 友達の満足	20.2±3.7	20.3±3.6	-0.56 (p=0.577)
F4: 学校と先生の満足	15.3±3.5	15.5±3.2	-0.91 (p=0.361)
F5: 全体的な健康の満足	20.0±3.5	20.0±3.4	-0.40 (p=0.693)
F6: 体力と勤勉性, 自尊感情	25.6±5.0	24.7±5.0	3.05 (p=0.002)
総 得 点	138.8±20.7	136.9±21.1	1.45 (p=0.148)

対応のない t 検定

表4-2 中学生の「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL)」の性別比較

	中学生		t 値 (p 値)
	男子 n=515	女子 n=489	
F1: 不安や悩み (がない)	27.1±6.9	24.0±6.1	7.52 (p<0.001)
F2: 家と家族の満足	23.3±5.2	23.4±5.5	-0.35 (p=0.724)
F3: 友達の満足	18.8±3.5	19.8±3.2	-4.90 (p<0.001)
F4: 学校と先生の満足	13.2±3.2	12.9±3.3	1.72 (p=0.085)
F5: 全体的な健康の満足	18.4±3.6	18.3±3.3	0.28 (p=0.781)
F6: 体力と勤勉性, 自尊感情	22.8±4.5	20.9±4.5	6.51 (p<0.001)
総 得 点	123.5±18.3	119.1±18.5	3.66 (p<0.001)

対応のない t 検定

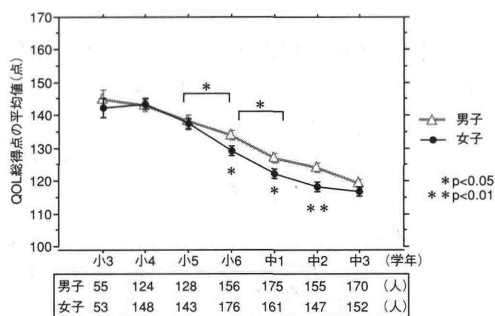


図2 「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL)」総得点の性別, 学年別平均値

参加校が2校と少なかったことに加え, 具体的操作期にあり自記式質問紙調査を行うことが難しい児童も含まれているため, 本調査結果は参考値として慎重に扱う必要がある。

総得点とすべての下位尺度において, 小学生の方が中学生より有意に得点が高く, 生活の満足度は学年が進むにつれて低下していた。この結果は, 小中学生を対象とした QOL に関する

他の報告とも一致していた⁵⁾⁶⁾。また, 総得点と「F1: 不安や悩み (がない)」、「F6: 体力と勤勉性, 自尊感情」が女子より男子の方が高い結果は, 2002年の調査と同様であった。平成16年度児童生徒の健康状態サーベイランスでは, 学年が高くなるほど睡眠時間の減少や欠食率の増加などの全体的な健康に望ましくない影響を与えるライフスタイルの変化が示されている⁷⁾。また, 起立性調節障害や気分の調節不全傾向に関連する自覚症状も学年が高くなるほど増加し, 男子より女子の方が高い⁷⁾。加えて, 10代において男子より女子の方がストレスは大きいという報告や⁸⁾, 男子の方が自尊感情は高いという報告もあり⁹⁾, 本研究で性差がみられた内容と同様の傾向がみられた。

総得点における性差は, 小学校6年から中学2年にかけてみられており, 女子の二次性徴や心理的な発達男子より早いことや, 二次性徴による性差が明確になる時期であることも影響を与えている可能性がある。

表5 「小学校中学年から中学生の生活の満足度 (QOL)」総得点の性別・学年別パーセンタイル表

学年	男 子					女 子				
	パーセンタイル値					パーセンタイル値				
	10	20	50	80	90	10	20	50	80	90
小3	119.8	126.2	148.0	166.8	173.4	110.4	124.4	143.0	164.2	169.6
小4	114.5	125.0	145.0	160.0	167.0	119.0	127.8	144.5	161.0	168.1
小5	112.9	122.8	140.0	159.0	167.0	110.4	118.0	136.0	157.0	166.6
小6	109.0	117.4	135.0	151.0	158.0	102.0	111.4	129.0	148.0	156.0
中1	101.0	111.0	126.0	145.0	153.4	95.2	107.4	122.0	139.2	147.8
中2	104.6	110.0	122.0	139.0	146.0	95.0	104.6	120.0	132.4	141.0
中3	95.1	104.0	119.5	131.0	139.9	96.0	101.0	116.0	132.8	141.0

生活の満足度の地域別比較においては、北海道・東北で低く九州・沖縄で高い結果であった。しかし、同地域であっても学校による有意差がみられたこと、有意差の大きな下位尺度は「F3：友達の満足」、「F4：学校と先生の満足」など学校の状況にかかわる因子であったことから、地域差としての解釈は慎重に行う必要がある。1型糖尿病の小中学生を対象とした全国調査において本質問紙の結果に地位差を認めなかった¹⁰⁾ことから、地域差については今後の検討が必要である。

学校選択の限界や、回答が得られなかった児童生徒の検討および児童生徒の健康問題の把握ができなかったこと、小学3年生の回答数が少なかったことなどが本研究の限界である。しかし、全国から得られた多数のデータに基づいた標準値を得ることができた。本研究で得られた通常学校に在籍する児童生徒のデータは、さまざまな健康問題をもつ小児のQOL評価を行う際の標準値として活用可能であると考ええる。

引用文献

- 1) 古荘純一, 柴田玲子, 根本芳子, 他. 小学生版 QOL 尺度をスクリーニングとして用いた学童の支援システムの検討. 小児保健研究 2006; 65 (1): 35-40.
- 2) 中村伸枝, 兼松百合子, 遠藤巴子, 他. 小学校高学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙の検討. 小児保健研究 2002; 61 (6): 806-813.
- 3) 中村伸枝, 松浦信夫, 佐々木望, 他: 1型糖尿病をもつ子どもと健康児のQOLの比較. 糖尿病 2006; 49 (1): 11-18.
- 4) 松浦信夫, 佐々木望, 貴田嘉一, 他. 糖尿病をもつ子どもと保護者のQOL全国調査の報告. 初版 東京: 新星社, 2004.
- 5) 松田宣子. 児童QOL評価の開発に関する研究—WHOQOL100 (成人版) に基づき作成した児童版評価を用いて. 小児保健研究 2000; 59 (2): 350-356.
- 6) 根本芳子, 松崎くみ子, 柴田玲子, 他. 睡眠時間・朝食の摂取状況と中学生版 QOL 尺度得点の関連性. 小児保健研究 2006; 65 (3): 398-404.
- 7) 財団法人 日本学校保健会. 平成16年度児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告書. 初版 東京: 財団法人日本学校保健会, 2006: 39-58, 94-108.
- 8) 中村伸枝, 兼松百合子. 10代の子どものストレスと対処行動. 小児保健研究 1996; 55 (3): 442-449.
- 9) 遠藤辰夫, 井上祥治, 蘭千壽. セルフエスティームの心理学 自己価値の探求. 初版 京都: ナカニシヤ出版, 1992.
- 10) 中村伸枝, 松浦信夫, 佐々木望, 他. 1型糖尿病の子どもと保護者の生活の満足度 (QOL) —地域による比較—. 第10回小児・思春期糖尿病研究会 Program and Abstracts, 2004: 20.